夕刊フジ　2022年5月7日（6日発行）

ニッポン ドクター和の 臨終図巻

㉕③ 医師　関本剛

最期まで医師として成長

今回書く人物のことは、読者のほとんどが御存知ないかもしれません。でも、こんなに素晴らしい医師が、僕の同志にいたことをどうしても、伝えたい。

神戸市で主にがん患者さんを対象とした在宅ホスピス〈関本クリニック〉の院長をされていた関本剛医師が4月19日、神戸市内の自宅で死去。死因は、肺がんによる脳転移。45歳の若さでした。僕が彼の訃報を聞いたのはその数時間後、夕方の往診途中の電話でした。街が色を失いました。僕は、親愛をこめて関本先生を「剛（ごう）君」と呼んでいたので、今日は剛君で書かせてください。

剛君にがんが見つかったのは、2019年10月。その年の春頃よりせき込むことが増え、胸痛が出たことから胸部CT検査を受けました。撮影後、彼は自分の目で左肺に4㌢ほどの腫瘍を確認します。「これ、本当に僕の写真ですか」。彼は思わず呟いたそうです。その後の精密検査で〈ステージ4の肺がん、大脳、小脳、脳幹への多発脳転移〉で余命2年と診断されます。43歳の誕生日を迎える直前でした。奥様と相談し、9歳の娘と5歳の息子に言葉を尽くして説明したそうです。医師の仕事を続けながら、「最善に期待し、最悪に備える」と。

もしも僕が剛君だったら……すぐに医者を辞め、誰にも行く先を告げずに、姿をくらますと思います。逃げるのかと後ろ指をさされても構うものか、と。

しかし剛君は、どこにも、何からも逃げませんでした。治療を続けながら、以前と変わることなく、がん患者さんたちと向き合ったのです。「なぜそんなに闘えるの？」一昨年のクリスマスの頃、僕はそんな質問をぶつけました。剛君は、笑顔でこんなふうに答えてくれました。

「がんになって初めて、がんの患者さんの気持ちがわかったんです。初めて相談を受ける患者さんに、〈実は、私もがんなんです〉と告げると、患者さんは心を開いて最期の希望までしっかりと伝えてくれる。患者さんとの垣根が取れたんです。医者には、〈私が治してあげますよ〉という傲慢さがどうしたってあるんです…だから今が一番、医者として、患者さんに寄り添えて充実している気がします」と。

「成長したなあ。ワシの百倍大人やなぁ」と感激していると、「長尾先生、医者は日々成長しないと！」と二枚目が相好を崩しました。彼は最期まで闘ったのではない。成長していたのです。僕はもうすぐ64歳。だけどもっと成長したい。大人になった僕と、あの世で乾杯してくれるかな。剛君、また逢う日まで。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。